

視点を改めて考える

三森ゆりか

ドイツの四年生から六年生くらいの子供の作文教材の中に、「視点を改めて考える」という課題がある。日本の教科書にも視点を改めて作文を書くという課題は載っているが、これは「鉛筆やボールの気持ちになって作文を書きましよう」という課題で、ドイツのそれは内容が全く違う。ドイツで実施される「視点を改めて考える」という課題は、一つの物語を使用して、複数の視点から物語を認識させ、それを語らせるという作業である。

例えば私の教室では、「赤ずきん」を「視点を改めて考える」課題に取り上げている。この物語を知らない子供はまずいなので、導入が簡単だからである。この「赤ずきん」を、赤ずきんの視点、狼の視点、作者の視点の三種類の視点から子どもに書かせる。つまり、赤ずきんと狼の視点は主観的な第一人称視点で、作者の視点は客観的な第三人称視点で書かせるのである。そうするとどのようなことになるだろうか。赤ずきんの視点では、狼が

下心をもって近づいてきたこと、先回りをして自分と祖母を食べるために花を摘むように勧めたことは認知できない。また、助け出されるまで狩人の行動は認知できない。狼の視点では、赤ずきんが花を摘んでいる間のことは認知できないし、二人を食べて眠り込んでしまった後のことは認知できない。赤ずきんと狼の視点では、それぞれ自分の置かれた範囲で見えること、聞こえること、経験できることしか認識できない。したがってそれぞれの視点で物語を書くときには、それが認知できる範囲の事柄だけを主観的に、しかし論理的に整合するように書かなければならない。一方、作者は全知全能の神である。作者の視点で認知できないことはなく、客観的な視点で事件の全貌を描き出すことが可能である。

子供に視点を改めて物語を書かせる場合には、私はまず子供と一緒に討論をする。赤ずきんの視点、あるいは狼の視点では、何が認知できて、何ができないのか、それはなぜなのか。作者の視点では、なぜすべての成り行きを認知できるのか。第一人称とは何か。つまり、「私・俺」とは何者か。なぜ「私」には、狼の心を読み

とれないのか。第三人称ではなぜすべてを書けるのか。「視点を改めて考える」課題のポイントは実はこの討論にある。訓練の本質が次の四点にあるからだ。

第一に、同じ事柄でも視点が変われば、認知範囲に相違があることを子供に認識させること。つまり自分と他人では同じ物を見ていると考え方も感じ方も違うこと、世界の切り取り範囲が異なれば一つの対象を全く異なった事柄として認知する可能性があることを理解させる。

第二に、子供に複眼的思考の技術を与えること。つまり自分の考えや他人の考えに多方面から客観的な検討を加え、その信憑性を検証する技術を提供させる。

第三に、子供に批判的思考の技術を与えること。つまりそれぞれの視点において認識できる範囲を論理的に分析させ、なぜそのような認識が成り立つのか、もし違う要素や条件が入り込んだらどのような結果になるのかなど、批判的に検討するための基本技術を提供させる。

第四に、他人の視点(立場・意見)を理解し、受容して尊重する気持ちを生かすこと。人間は主観で物考えるので、自分の考えこそ絶対だ

と思いがちである。複数視点で考えることにより、子供の中に様々な考え方を受容し、寛容する心が育つ。

この「視点を改めて考える」訓練は、一つの物語を複数の視点で認知することだけでは終わらない。ドイツでは九年生くらいから論証文の訓練が始まる。ここでは一つの論点を肯定と否定の二つの視点から徹底的に検証し、自分の結論を導き出す。題材は社会問題や政治問題に変わるが、複数視点で対象を批判的に検討するという基本は同じである。一つの物語を複数視点で認知するところから始まり、論証文へ、論文へ、ディベートへと繋がってゆくドイツの言語技術教育のシステムは、極めて合理的な構成である。社会に出て、人とコミュニケーションをするとき、仕事をするとき、交渉や説得、討論や議論をするとき、自在に複眼で思考し、対象を批判的に検討する技術があれば、それは大きな財産となつて一人の人間の人生を支えることになるだろう。日本の国語教育には、このように人が生きていくために必要な技術を合理的かつ系統的に訓練するシステムが欠けている。

(つくば言語技術教育研究所)

その
ものの
コラム